日本IPグローバルチャレンジの報告

Report on the Japan IP Global Challenge Program

吉村 毅 YOSHIMURA Takeshi
デジタルハリウッド大学大学院 教授
Digital Hollywood University, Graduate School, Professor

飯塚 江美 IIZUKA Emi
映画プロデューサー
Film Producer

2016年度に発足したデジタルハリウッド大学大学院（DHGS）「日本IPグローバルチャレンジ」のこれまでの経過および成果と、現在の状況と、今後の期待について報告する。日本の小説やマンガには、有名ではない作品の中にも良質かつエンタテイメントとして非常に優れた作品が数多くあり、映画やTVドラマやゲームなどの映像コンテンツ制作における原作として活用できる可能性が高いと考え、このプロジェクトをスタートさせた。日本は、原作の産油国ならぬ産出国になり得る！　その無尽蔵とも思えるほどの豊富な原作コンテンツで、世界のエンタテイメント業界の発展に寄与することを目的として活動をしてきた。その成果への過程として、現在、当該プロジェクト協力会社である徳間書店の小説『千年鬼』（西條奈加：著）が、香港の映画会社のプロデュースにより世界に流通する映画として製作準備段階にある。

キーワード：日本IP、グローバルチャレンジ、実写化、香港、中国

1. 日本IPグローバルチャレンジ・プログラム

デジタルハリウッド大学大学院（DHGS）の2017年度カリキュラムより、IP（知的財産）のビジネス活用に関する科目を強化する一環として、学生が日本の埋もれている高ポテンシャルなコンテンツを発掘して海外でエンタテイメント映像作品化する（映画・TVドラマ・ゲーム）ことを目的とする「日本IPグローバルチャレンジ・プログラム」がスタートした[1]。

ほぼ同時期に並行して、デジタルハリウッド大学（DHU）は、元GAGA社長で現在はフィロソフィア株式会社の代表を務められ、この分野での第一人者である藤村哲也氏を特任教授に招聘し、藤村教授の貴重な知見を学内外にシェアする活動を開始していた。

図 1: デジタルハリウッド大学　藤村哲也特任教授の特別講義「誰も知らない IP 映像化の世界～ IP 大国、衝撃の未来」

第1回開催の特別講義は、「『ゴースト・イン・ザ・シェル』に見る日本のIP知的財産を基にしたハリウッドでの映画製作の意義と将来性」[2]であった。その後も『カウボーイビバップ』や『ワンピース』のハリウッド実写化の実例を交えた講義を行っている。

図 2:　藤村哲也特任教授の特別講義（右から DHU 杉山学長、藤村特任教授、吉村毅）

このような先進的な日本のコンテンツビジネス界での取り組みに刺激を受けつつ、世界に、そして自分の母国に日本のコンテンツを伝えていきたいという有志が集まる形となった。

プロジェクトとしてアプローチする対象国は、デジタルハリウッドの全ての留学生の母国とし、結果として、欧米のみならず、南米、アジア、アフリカなど全世界を対象とすることとなった。このプロジェクトは、大学院生が、日本の小説やマンガなどのオリジナルコンテンツを自ら発掘し、海外各国にライセンスの形で販売をすることにチャレンジすることを通して、コンテンツのグローバル流通のナレッジを身につけることを目的とした課外プログラムでもある。

留学生らが自ら「作品の知名度に頼らない、本当に面白いオリジナルコンテンツ」を発掘（掘削）し、それら日本の小説やマンガが原作となり、世界各国で、映画化、TVドラマ化、ゲーム化、翻訳出版されることを目指した。原作のソースのご提供は「徳間書店」様に趣旨にご賛同いただき、ご協力いただいた。徳間書店が保有する小説・マンガなどの原作IPを、本学でコンテンツマネジメントを研究する留学生が、それぞれの母国での映像化活用を企画する。実際に海外の現地へ赴き、母国語を駆使し、エンタテイメント業界の企業に直接提案を行う実地演習も実施された。それぞれの大学院生の入学前のキャリアや国籍や言語能力など、独自の強みも活かした、地域や業界をまたぐダイナミックな研究実践活動となった。

©2020 Digital Hollywood University

2. 中国語圏での映像化実現に近づいている実例

多様な活動の中で、現在、中国語圏での活動が実を結びつつある。現在、中国は、世界第２位のエンタテイメント市場となっている。そして、映像業界第１位であるハリウッドだけでなく、中国語圏においても日本のＩＰの映像化・リメイク化が行われ始めている。「海外にまだ知られていない作品を中国語圏に売り込んだらどうか？ そのためにどうすべきか？」、大学院生と共に中国語圏市場に対し、実際にチャレンジし検証した概要をここにレポートする。

初期段階から今日まで、株式会社アミューズの海外映画事業担当として長年にわたり国際マーケットで数々の成果を残し、プロデューサーとし独立した近年は、中国との映像ビジネスでも活躍している飯塚江美が学生指導を含むビジネス実務面を担当している。

2.1 売り込みの経過と活動内容

2017年１月に、海外にまだ知られていない作品を海外に売り込むための中国語圏チームとして、筆者吉村毅と大学院生の陳達さん、筆者飯塚江美の３名からスタートした。後に、大学院生･林子依さん、劉欽さん、青沼紗希さん、川端龍介さんらが加わった。スペイン語圏は香山サクラローサさん、韓国語圏はベ・インホさんら学部生数名も参加した。

IPの商談＝版権の商談である。つまり、海外にまだ知られていない作品＝IPを売り込むというのは、本一冊、DVD一枚を売るわけではなく、その作品の版権を売り込むことである。では版権を売り込むため＝先方から考えるとすると買うために何が必要か？　その作品を知るための資料が必要となる。今回は海外への売り込みとなるわけだから、外国語での資料が必要となる。

では、海外へ作品を売り込むには、どうしたら良いのだろうか？通常、版権売買の商談の場というものは、他の貿易と同じように個別にそれぞれの会社に行き来して行われる場合もあるが、映画の場合、年に数回行われるフィルムマーケットがあり、そこに業界人が集まり、数日間（短い場合は３日間、長い場合は10日間程度）をかけて数多くの商談が行われている。フィルムマーケットは世界中で行われる国際映画祭（ベルリン国際映画祭、香港国際映画祭、カンヌ国際映画祭、釜山国際映画祭、東京国際映画祭など）に付随して年に数回行われている。そこでは、出来上がった映像作品（映画･ビデオ･TVドラマ・ネットドラマなど）のみならず、企画段階の版権が売買され、そして映像化権・リメイク権の商談も同時に行われている。

今回は、毎年３月に行われ、中国語圏から最も多くが参加する香港フィルマート（香港国際映画祭に付随）に参加し､そこでプロデューサーや製作会社にプレゼンを行うことを決定し、それに伴い、プレゼン用の作品資料を作成していくこととなった。

作品の選定としては、デジタルハリウッドの関連企業である徳間書店の協力を得て、海外リメイク（映像化）が可能なミステリー・サスペンス約20作品を選択してもらい、売り込むために必要な基本資料（日本語）を準備してもらった。今回は、手始めとして映画化用として人気が高いミステリー・サスペンスに絞った。

今回、チームでは、該当作品の基本資料を中国語圏の製作会社・プロデューサーにプレゼンするため、中国語（繁体字・簡体字）で作成することが必要となり、陳達さんが中国語版を準備した。

次に、徳間書店から用意された基本資料には小説の題名･作家名･短いストーリーのみが記され、ビジュアルは小説の表紙の写真の添付のみであるため、製作会社及びフリーランスのプロデューサーが興味を持った際に、ストーリーをより理解してもらうため、2000字以上の中国語の資料（ロングシノプシス）が必要となる（結果として6000字ほどが適当と判断）。プレゼンする際に、例としてチーム内でお薦め作品のロングシノプシスを数本、先に用意することにした。そのため、各自20本の中から選んだ小説を読み始め、ロングシノプシスを日本語及び中国語で作成した。

2017年３月に映像化・リメイク化の権利の売買の商談の場である香港フィルマートに参加し、中国・香港・台湾・韓国の製作会社及びフリーランスのプロデューサーに本プロジェクトの作品を紹介した。

図３：香港フィルマートにて院生メンバーと（向かって左は吉本興業「ぜんじろう」氏）

対象は、中国から４社（内２社から数作品に興味を持たれ、ロングシノプシスを希望された）、香港から５社（内２社から数作品に興味を持たれ、ロングシノプシスを希望された）、台湾から３社であった。2017年４月に興味を持たれた中国語版のロングシノプシスを作成開始し、中国語翻訳したロングシノプシス数は、計11作品分となった。

残念ながら、他作品に関しては設定の問題（日本独特であり、その設定を改変してしまうと小説の持つ世界観が崩れてしまう）などから興味を持たれなかった。また、大手の製作会社はどちらかというとオリジナル作品に力を入れていきたいという意見も見られた。しかし、アジアでも人気の高い東野圭吾作品は別という声が多かったのも事実であった。

その後、香港の２社から２作品に関して、より深い興味を持たれ、１社には小説自体の翻訳を依頼された。

2.2 映像化案件の経過と活動内容

2017年６月に香港の独立系プロデューサーであるポリー・ユン氏が来日、ロングシノプシスを作成した『千年鬼』の映像化（当時はネットドラマ）の検討をしたいとオファーが入った。

図４：徳間書店『千年鬼』（西條奈加：著）

彼女（ポリー・ユン氏）は同小説の持つ世界観及び設定、そしてストーリーそのものに惚れ込み、どうにかして映像化したいと希望し、その世界観から実写版というよりはアニメーションの方がふさわしいであろうと判断していた。キャラクター設定の変更など改変するに当たりいくつかの希望と疑問が伝えられるが、先方がまだプラットフォーム候補（今回はネットドラマということであったのでNetflixやAmazon、HBOといったネット局）や製作費等の詳細が固まっておらず、作家サイドに説明する上で必要な詳細をまとめてもらい再度話をすることとなった。

一般的に、出版社（作家サイド）と話をする場合、映像化・リメイク化したい権利（映画化、TVドラマ化、ネットドラマ化、アニメーション化など）の確認、版権の希望額、製作会社名、監督名、プラットフォーム候補（ネット局、テレビ局、映画化の場合は規模）、TVドラマの場合、予定話数、主役候補などが記された企画書を用意してもらう必要がある。真剣に検討している場合、製作会社・プロデューサーからこれらの詳細が出てくる。出て来ない場合は、いくら有名プロデューサー・大手製作会社であっても、制作されない可能性が大きい。

ポリー・ユン氏は香港の独立系プロデューサーである。香港生まれ。1999年香港中文大学工商管理学院卒業後、英国において欧州映画の研究を続け、2002年に修士学位を取得。学位取得前の2000年に香港メディアアジア及びフィルムコ・エンタテイメントグループに入社。『ジェネックス・コップ2』『フルタイム・キラー』『男人四十』などの作品の配給宣伝を行うと同時に、世界各国の国際映画祭に参加し、日本のアニメーションとして中国で初めて公開された『銀色の髪のアギド』（GONZO製作）を含めた作品の海外セールスを行う。製作方面では、香港有名監督ジェイコブ・チャンとパートナーシップを結び、日本のマンガを題材とした『墨攻』や、中国のスター、チェン・クン主演で上海国際映画祭に出品された『肩上蝶』を製作（脚本も担当）。2018年ウディネファーイースト映画祭に出品された『女皇撞到正』、2019年大阪アジアン映画祭にも出品された『非分熟女』などがある。

ポリー・ユン氏の別企画のスケジュール調整などから、2017年6月以降、詳細に関して延期の要請が度々入り（その都度、自分の情熱が薄れていないことを強調される）、2019年10月、『千年鬼』に関して最終的に長編アニメーション映画での製作に関する金額的オファーが入る。

ポリー・ユン氏は同時に、製作準備として原作者に長編アニメーション映画としてのクオリティの参考にしてもらうため、香港政府から製作資金の援助を受けて、長編映画の製作会社と一緒に短編『世外Another World』を製作（長編アニメーション映画と同名で設定は似ているが、ストーリーは異なる）。同作品は香港政府の映像支援機関ニューアクションエクスプレスから各映画祭に出品され、デジコン6アジアのグランプリ、シネシナニューヨーク中国語映画祭新人部門の最優秀作品賞を受賞し、高評価を得た。

2020年1月、次の段階として、また長編アニメーション映画に関しても資金援助を受けるため、脚本を書き上げた（プロデューサーのポリー・ユン氏が脚本も担当）。徳間書店より原作者にも確認を取り、好評価を得た。

2020年3月に、プロデューサーのポリー・ユン氏は独立系のプロデューサーであるため、製作費の資金調達が必要となった。その一環として、2017年に参加した香港フィルムマートと同時に行われる企画マーケット（HAF）に応募し、長編アニメーション映画『世外Another World』（原作『千年鬼』）が選ばれた。しかし、2020年はCOVID-19の影響により開催自体が8月に延期され、オンラインによる開催となった。今後、他の企画マーケットにも参加予定である。

海外の独立系プロデューサーの多くは、国内映画と言うよりは、企画段階から海外マーケットや国際映画祭を視野に入れて、合作映画として資金調達を行うことがある。国外から資金調達を行う場合、このような企画マーケットにおいて出資者及び配給会社各社と商談を行い、資金調達を行う場合がある。ここ数年、日本の独立系プロデューサーも海外での配給及び映画祭出品を念頭に置き、国外からの資金調達を企画段階から考えて、同様の企画マーケットに作品を応募し始めている。但し、商談はほぼ全て英語でなされるため、数はまだ少ない。

HAF（Hong Kong-Asia Film Financing Forum）劇映画大賞を受賞した。HAFは、毎年3月に香港で開催される企画マーケットで、香港国際映画祭、香港フィルマートに付随し、同時に開催される。HAF側が企画段階の作品を30本程度選択し、企画マーケットにおいて該当作品に関して、資金調達を目的としプロデューサー・監督が出資者・セールスカンパニー（配給権の海外セールスを行う）・配給会社とミーティングを行うものである。

HAF側が作品を選択し、その作品に関してミーティングが行われるという点が、前述したフィルムマーケットとは異なる点である。選ばれたという段階で、ある種クオリティが確保された証とも言える。そして、HAF評議員が特に優秀と判断した作品には製作資金の一部として賞金も授与される。近年、製作途中の作品を対象とした部門も設けられ、同様のミーティングや賞金授与が行われるようになった。

そして、HAFにおいては選ばれる作品は中国語圏の作品が多いのも特徴と言える（中国語圏には中国、香港、台湾のみならずマレーシア、シンガポールなども含まれ、欧米の中国語圏も含まれる）。

同様な企画マーケットはベルリン国際映画祭、カンヌ国際映画祭、釜山国際映画祭、東京国際映画祭、台湾金馬賞期間においても開催されている。配給権を求めるというよりは出資・合作に興味を持つ業界人を対象としている。

2020年8月に延期されたHAFで、この『世外 Another World』が劇映画部門の大賞を受賞することができた。企画、脚本が高い評価を受けた。関係各位のご努力とご協力に厚く感謝したい。

2017年1月に始まった本プロジェクトによる作品『千年鬼』が完成するのは2022年以降と予想されるが、完成後には香港国際映画祭など世界の映画祭、映画マーケットに参加していくことになると予測している。

図5：香港 HAF で劇映画大賞受賞

4. 考察

2017年3月に行われた香港フィルマートにおいて各社とミーティングを持った上での考察は次の通りである。

（1）大手の製作会社は一般的にはオリジナル作品を希望するという回答であった。有名作家の作品である場合は例外とも言える。今回、製作会社の立場としては受け身だったと言えるが、本来、クリエイターは主導的でありたいと願うものであり、そのため私たちの提案に対して興味の度合いが低かったのも事実であった。

(2) 残念ながら、小説においては東野圭吾を始めとする海外でも人気のある作家のものにしか興味を示さない傾向が強かった。この傾向は、特に中国で見られる。

では、今後こちらから、著名ではない日本IPを売り込むためにはどうすべきなのか？

(1)「継続」が重要なファクターとなると思われる。今回はジャンルも一つに絞り、過去作品をリストアップしたものだったが、ジャンルに囚われず、過去作・新作を含めて紹介し続けることが重要なのではないだろうか？　有名作家以外にも面白いIPがあることを知らない事実もあることから、それを紹介し続けることが必要ではないだろうか？　今回はジャンルをミステリー・サスペンスに絞ったが、別のジャンルを紹介することもまた必要と思われた。トレンドは数年毎に変化し、製作会社の興味も変化する。そのために、良質と思われる作品であれば紹介していき続けることが重要となる。

(2) 成功可能性としては、クリエイターが主導的に動いてくるものに比べると低くなるが、IPを売り込むためには「継続」的に情報を提供して、両者の関係性を築き上げ、先方が欲しいと思うIPをできるだけ紹介し提供し続けるようにする。そうすることで、今回の『千年鬼』のように、クリエイターが興味を抱くIPに出合うこともある。

今回、日本IPグローバルチャレンジとして、『千年鬼』の企画を進めることができたことは大きな成果の一つと言えるだろう。

図 6：短編「世外 Another World」ティーザーポスター

5. おわりに

今回の『千年鬼』に関しても言えることであるが、海外でIPが映像化されるまでには時間がかかる。ハリウッドでリメイクされた数々の作品も、5年、10年かかり、やっと劇場公開されているのが実情である。時間的観点から見ても、こちらから「海外に知られていないIPを海外のプロデューサーや監督に売り込み映像化すること」は〈継続〉する必要性があり、IPを売り込む（セールスする）ということは、映像化された作品に少なからずの責任が伴う。大学4年間＋大学院2年間という6年間では、一つの作品を映像化するまでの全てのプロセスに携わることは難しいかもしれない。しかし、その一部に携わることと、映像製作のこのようなビジネスの部分においては長い時間が必要であること、また監督・俳優など以外の映画ビジネスにおいての役割を実地から学ぶことも重要な側面と思われ、意義深いものではないだろうか？　また、ひとりのプロデューサーとして、学生たちがその一部でも学んでくれたら嬉しいと願う。

そして、世界最大、最強のエンタテイメント産油国（IP埋蔵国）は日本であると考え、近視眼的な投資採算だけにこだわらず、デジタルハリウッド大学大学院が教育機関であればこそ可能なチャレンジを通じ、学生の成長と、結果としての世界市場開拓、ネットワーク構築に寄与していきたいと考えている。

参考文献

[1] "「日本IPグローバルチャレンジ・プログラム」プレスリリース" https://gs.dhw.ac.jp/news/161130.html（参照2020年7月11日）.
[2] デジタルハリウッド大学："特別講座ゴースト・イン・ザ・シェルに見る日本のIP知的財産を基にしたハリウッドでの映画製作の意義と将来性」開催レポート" https://www.dhw.ac.jp/feature/lecture/fujimura02/（参照2020年7月11日）.